

書 評

朝岡康二著

考古学民俗叢書

『雑器・あきない・暮らし

—民俗技術と記憶の周辺—』

渡部 鮎美\*

昨今、「手仕事」がブームである。若者から中高年まで、幅広い年齢層で民芸や民具に対する関心が高まっているという。しかし、手仕事への関心が良い品を選ぶことや品物に表れる技巧についての雑学に終始してしまうのでは、民芸や民具のもつ深い世界を知ることはいできない。

本書は日本民具学会・道具学会の会長を務めた著者による、東南アジア的な視野をもった民具研究の集大成である。著者は専門である冶金学・鍛冶技術史の知識を余すことなく使い、広範な関心をもとに民具に関する技術と歴史を広く深く掘り下げていく。

鉄製品とその製造技術を中心にして「ひと・もの・わざ」を視点に民具と民芸の背景を記述する本書は5章で構成される。Ⅰ章「職と職人・道具と民具」では今日までの民具研究を概観しつつ、職、職人、道具という概念の歴史的展開を示す。Ⅱ章「ものとわざの伝播」では鍛冶屋の技術の伝播と変遷を取り上げ、ものの使い手と作り手の双方の視点から、ものの普及と製造技術の変化を論じる。とくに明治以後のアルミ鍋の普及は作り手の技術の発達と、調理器具や台所環境の近代化、戦争による生活の変貌といった使い手側の暮らしの変化によるものであったという指摘は興味ぶかい。また、戦争や災害などの非常時に代替品として普及したアルミ鍋の歴史は軍需から民需へ、民需から軍需へという需要の

変化の繰り返しによっておこったものという。つまりはアルミ鍋の普及史が平時と非常時の反復であった日本の近代化と重なるのである。

Ⅲ章「くらしの場の変容と記憶」では沖縄と中国浙江省の町や村落空間を地理学的に分析し、そこでおこなわれる商品の流通や職人の往来といった日々の商業活動や地域の習俗をも含めた商工業空間の形成史を論じている。つづくⅣ章「記録された技術」では近世沖縄の鍛冶職人による技術の記録から、職人たちが廃品を使い回す技術をもって原料となる鉄の不足に挑んでいたことを明らかにしている。さらに著者は鉄器製作の技術が文書として伝えられた経緯を追い、時代の変化や鉄器を使う人々からの要望に応じて編み出された職人たちの技術を推察しながら沖縄の鍛造文化の特徴を抽出する。

Ⅴ章「もの・わざ・からだと資料化」ではデジタル画像を利用するという新しいアプローチで仕事の姿勢の変化を通史的に論じている。さらに同章ではスペインの博物館に収蔵された日本に関わるコレクションの収集活動を追い、外国人の目から見た民芸と日本における観光みやげとしての民芸という、今日の民芸運動研究に対する新たな視座を示している。

現在の手仕事ブームのなかで民具や民芸は美や素朴さといった表面的な言葉で語られる。では、民具や民芸のもつ深い世界を語るのに何が必要だろうか。著者は民俗技術を「もの・わざ・からだ」が一体化したものとして定義する。それは「もの」を使う人々の生活経験や文化、「もの」づくりに関わる人間関係や地域資源、技術といった諸要素が一人の人間の「からだ」を通して発露したものともいえる。品物の蘊蓄として語られる職人技と、ものを使う人々や地域の姿、職人の生き様といった膨大な背景を背負った「わざ」には大きな隔りがある。そして「わざ」を語ることができるのは、地域を知り、人を知り、技

\*国立歴史民俗博物館 非常勤研究員（研究支援者）

術を学んだ者だけである。本書は「ひと・もの・わざ」を通して、民具と民芸の深遠な世

界をみせてくれる。

(A5判 501頁 2011年8月 慶友社)